

＜翻 訳＞

パスカルの方法*
——弁証論的方法的手段——

M. ルゲルン、M. = R. ルゲルン 著¹⁾
古 家 曜 子 訳**

弁証論の役割は、読者を否応なく納得させるような説得手段を用いて、すでに知られている真理、かつその根拠となるべき真理を提示することである。したがって、弁証論の主だったテーマそのものを検討するに先立って、パスカルの方法、パスカルがどう認識の問題を理解したか、われわれ自身、自分が理解したことをどのように他人に伝えるかを検討するのが適当である。実際、認識論的与件を大幅に変更し、新しい説得手段を用いれば、伝統的テーマといえども相当程度新しいものに変えることができるのである。

パスカルは、弁証論にとりかかる前にすでに認識の問題に思いをめぐらせていた。その最初の考察は、自分の方法の正しさにこだわる学者のものである。1651年頃に書かれた『真空論序論』には、彼がこの問題について熟考した痕跡ともいえる一群の原理が記されている。パスカルの考えはその後も変わっていないから、『パンセ』の分析にとりかかる前に『真空論序論』の検討が不可欠である。『真空論序論』で、パスカルはまず権威に服従する真理と、理性の統制に服する命題との決定的な相違を明らかにする。

考察すべきは、一方は単に記憶に依存し、純粹に歴史的で、著者たちが書いたことを知ることのみを目的とするのに対し、もう一方はただ推理に依存し、まったく断定的であって、隠された真理を求め発見することを目的とすることである。

パスカルは、第一の範疇に歴史・法学・言語と、われわれにとって殊に興味深いことに神学をも含めている。これらの知識はすべて権威に服従する。

権威だけがわれわれにこうした知識についての蒙を啓く。ところで、この権威が主要な力を発揮するのは神学においてである。神学においては、権威は真理と不可分であり、われわれは権威によってしか真理を知ることができないからである。その結果、理性にもっとも理解しがたい問題について完全な確信を与えるためには、そのような問題が聖なる書物に含まれることを示すだけで十分である。(あたかももっとも理性的な事柄の不確実性を示すためには、それらが聖なる書物には含まれないことを示すだけでよいのと同様である。) というのも、このような原理は自然と理性とを超越しており、人間の精神は余りに非力で自分の努力だけでは真理に到達することができず、もしきわめて強力かつ超自然的な力によって真理のもとへと運ばれるのであれば、このように高度な英知に到達することはできないからである。

この「きわめて強力かつ超自然的な力」とは、信仰、神から人への賜物のことであり、これはなによりも権威に服従することなのである。このようにして、パスカルは神学に関する自分の見解を明らかにした。かれは宗教の基礎となるある種の真

*キーワード：方法、説得、心情

**関西学院大学社会学部兼任講師

1) これは、マリー＝ローズ・ルゲルンとミシェル・ルゲルン（当時リヨン第二大学教授）による『パスカルのパンセ 一人間学から神学へ』 Michel et Marie-Rose LE GUERN, *Les Pensées de Pascal de l'anthropologie à la théologie*, Larousse, Paris の第三章 Les outils méthodologiques de l'apologie の翻訳である。なお、引用は私訳である。